

# 万象点描



農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一氏

## 「国民皆農」すぐそこまで

自らの百姓をやるのが夢で、山梨市牧丘町にある石垣で区切られた400坪(1坪＝3・3平方丈)ほどの竹林と化した傾斜地を開墾して畑にし、自然農による週末農業を始めて26年目となる。宅地部分を除いた300坪のうち土の悪い100坪弱を雑木林に、残りを野菜と花木をミックスさせた、キッチンガーデンとしている。夜が白み始めれば小鳥たちのかまびすしい鳴き声に目を覚まされ、冬を除いては緑で覆われ生物多様性にあふれた畑は野菜だけでなく、たくさんの野草も含めて食卓をにぎわせてくれる。

土に触れ、汗をかきながら野菜の成長にささやかに手を貸し、成長を見守る。悪天候

## ■ 農の持つ多様な能力

や病虫害にやられることもしばしば。自然の恵みの豊かさと同時に、人間の思い通りに必ずしもならない命の不合理さ、人間の無力さを教えられる。人間は自らの分をわきまえて、自然を尊重した生き方によって初めて人間らしく生きられることを実感する。

こうした経験を子どもたちにも少しも味わわせたいと、隔月で1泊2日の子どものいなか体験教室を始めたが、これもはや12年目を迎えた。基本的に子どもが対象だが、回数を重ねるほどに子どもだけでなく、大人にとっても農業体験、自然体験が大事であるように感じられてならない。子ども20人ちょっとにボランティアとして親が6、7人というのが平均的な参加人数であるが、大人にとっても数少ない

体験の機会であると同時に、日常の管理社会を忘れることのできる貴重な時間・空間となっている。子どもを就寝させてから、ワインを酌み交わしながらの親たちの交流会は話が尽きることがない。

自然や農業は日常的に接することで体感していく。そこが重要であり、子どもいなか体験教室はあくまでその入り口にすぎない。しかし市民農園、体験農園、さらには定年帰農や田園回帰現象が象徴するように、市民皆農、国民皆農への取り組みは点から線へと広がりがつつある。

さまざま取り組みを積み重ねる中で、農という営みが社会を革新していく力、すなわち社会デザイン能力を持っていることを感じさせられる。もっぱら農政や農学では産業としての農業だけが語られるが、生産から暮らしまで含めたなりわいである農の世界として捉えた時、これは浮かび上がってくる。

具体的には①食料自給能力(自ら農業に参画することで自給部分を拡大)②自立能力(食料の一定程度を自給していくことで経済の外部依存度を低減)③コミュニティー形成能力(農業を媒介に新たなコミュニティー形成)④教育能力(農業体験、自然体験、味覚教育)⑤生きがい・働きたい実感能力(自ら流した汗の量が農産物の出来に反映)⑥文化形成能力(祭りなどの多様な行事、景観)——が挙げられる。

国民皆農への流れは、これらの能力を引き出し、工業原理、経済至上主義とは異なる生命原理、脱マネーの世界であり、それが足元、地域から芽生え始めている。農的社会への扉は開かれつつある。